

# 暮らしのデザイン

レポート  
第3回 2013.  
11.16  
[sat]

## 「子育てを豊かにする生活のデザイン」

子どもの伸び伸びとした成長を促すにはどのような環境を用意すればよいか、子どもの発達段階に応じて家族や友達とどのような関係をつくれればよいか。今回は、よりよい「子育て」を実現するための2テーマを取り上げ、講演を行いました。

### 《講演1》子どもの遊び環境

子どもが健やかに成長するために、「遊び」は欠かすことのできない重要な役割を担っています。子どもを取り巻く生活環境が変化の中で、大人は子どもの豊かな遊び体験をどのように保障すればよいのかを見つめます。



講師：松田 純子氏  
実践女子大学 生活文化学科 准教授

#### ■社会と子どもの遊びの変容

都市化、核家族化、少子化、情報化などが進んで日本の社会は急激に変化しており、地域・家庭の教育力が低下しています。子どもの遊びも変容し、友達と思う存分体を使って、自分たちで考え、自由に遊ぶことが難しくなっています。

#### ■遊びの機能

遊びは子どもの仕事です。子どもは遊びを通して学び、成長します。遊びによって、身体・運動、知覚・思考、言語、コミュニケーション、情緒、自己認識/他者理解、社会性など、さまざまな発達が促されます。健全な子どもの成長発達にとって、遊びは欠かせないものなのです。

#### ■発達の最近接領域

心理学者レフ・ヴィゴツキーは、子どもが自分一人のできる発達の水準（第1の水準）と、仲間や大人からの援助があるとできる発達の水準（第2の水準）にはズレがあるとし、このズレを「発達の最近接領域」と名付けました。

同年代の子どもたちの最近接領域は同レベルにあるため、お互いが刺激し合い、お互いの最近接領域に働きかけます。そして、遊びの中の「挑戦」も最近接領域を刺激し、自らの発達水準を上げていきます。子どもたちは楽しく遊びながら、自分と仲間の発達水準を高め合うのです。

#### ■遊びの意義

遊びは自発的な活動であり、子どもは結果よりプロセスに興味を持って遊びに取り組みます。また遊びは、何ものにも制限を受けない自由な活動です。

遊びは、大人の指導によるのではなく、子どもの自発的な喜びを伴った活動として展開されることに大きな意義があります。子どもが時間的にも空間的にも思い切り自由に遊ぶことの重要性を理解し、保障していくことが大切です。

#### ■子どもの「楽しさ」を支える環境

子どもにとって遊びは「楽しい」活動です。その「楽しさ」を保障するために、下記のような要素を備えた環境を整える必要があるでしょう。

- 安心して十分に探索できる時間
- 興味を持ったことに時間を延長して集中できる機会
- 仲間との対話（学びの共同体）
- 継続し拡張する活動（過程）に関わる機会
- 興味、能力、発達にそった選択
- 探索、繰り返し、挑戦による発見
- 個人のリズムや気質の尊重 (Ward, G. & Dahlmeier, C., 2011)

また、建築家の仙田満は、遊びの原空間として下記の6つを挙げています。特に最初の3つのスペースは重要としています。

- 自然スペース ●オープンスペース ●道のスペース（人やモノが移動し出会うスペース） ●アナーキースペース（無秩序なスペース） ●アジトのスペース ●遊具スペース

（仙田満『子どもと遊び』（1992））

## 《講演 2》子どもの社会性の発達

乳児期・幼児期・児童期・青年期と発達段階に応じて、子どもたちの家族・友達等との関係の持ち方はどのように変化していくか、大人は子どもたちの社会性を育てるためにどのような支援ができるのかを考察します。



講師：高垣 マユミ氏  
津田塾大学 国際関係学科 教授

### ■社会性とは何か

社会性とは、広義には「個人が自己を確立しつつ、社会の中で適応的に生きていく上で必要な諸特性」と定義することができます。一人ひとりが自分の考え方や生き方、価値観などをしっかり持った上で、どのように人と関わっていくかに社会性が現れ、それらは、表象能力、模倣、ことば、情動機能などの要素で構成されます。

### ■乳児期の社会性の発達（生後～2歳）

脳の視覚・聴覚・眼球運動・感覚・知覚などを司る部分が最も成長する時期です。外界の変化の関係を把握できるようになり、感情・情動が豊かになります。また、認知能力が高まるため、自我も発達して自己主張をするようになります。

生後2～6ヵ月で、人の顔や文字が記載された新聞をじっと見る「注視行動」が見られます。愛着形成に伴い、目標を修正しながら協調性を持つこともできるようになります。

### ■幼児期の社会性の発達（2～6歳）

運動能力、言語能力、思考能力、社会性等が発達します。意図伝達や探索などの行動が見られるほか、情動のコントロールや自己の対象化ができるようになります。

仲間関係も発達し、他者への理解や共感、社会的カテゴリーの理解が進んでコミュニケーション能力や自己統制能力が高まります。社会的遊びも発達していき、「傍観」や「一人遊び」から徐々に、友達と一緒に遊ぶ「連合遊び」や役割分担しながら遊ぶ「相補的組織遊び」をするようになります。

### ■児童期の社会性の発達（6～12歳）

「ギャング・エイジ」とも呼ばれ、仲間と徒党を組んで遊ぶようになります。また、具体的操作期から論理的操作期に移行するとともに、時間・空間・重さなどの概念を理解できるようになります。

対人交渉方略の能力も発達し、衝動的・一方的に命令して他者をコントロールしようとする方略から、心理的影響を意識的に使ったり、お互いの目標を追求するために自他双方の欲求を協力的に変える方略を用いるようになります。

### ■青年期の社会性の発達（13～20歳）

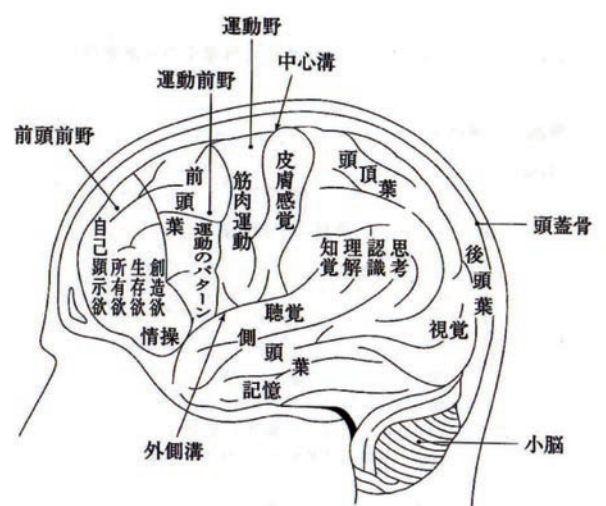
思考の時間軸が広がることから、不安要因も増大していきます。自我同一性が確立し、精神的に親離れる心理的離乳が見られる一方で、友人や異性との親密性や連帯を深めていきます。

向社会性が発達し、社会の慣習として困っている人は助けるべきなど、「抽象的に内面化された感情」への反応度が上がります。友人関係では、「防衛」「同調」のパターンから、「積極的相互理解」のパターンへと移行していきます。

### ■まとめ

親子関係について概観すると、両親は子どもの重要なサポートシステムであり愛着の対象です。両親と仲間の関係には重要なつながりがあり、適度な親子間の葛藤が一般的でそれが肯定的な発達を機能させます。親子間の葛藤は思春期の発達の頂点でより大きくなる、ということが、現代の一般的なモデルと考えることができます。

最後に、社会性には適時性があり、脳の発達とともに、適切な時期に適切な経験を積み重ねていくことが必要となります。



大脳新皮質の発達